

心を育むとは ～子どもの心が負の側に傾いたとき～

鯨岡 峻 京都大学名誉教授

「心を育てる」ことを園の目標に掲げていない園はないといっても過言ではありません。けれども、頑張る行動の裏には「頑張る心がある」、協調する行動の裏には「協調する心がある」というように、目に見える行動から目に見えない心の存在を推論してはいないでしょうか。これまで「心の育ち」と言われてきたものの大半は、行動の育ちを問題にしたものです。特に子どもの心が負の側に動いたとき、負の行動への対応を問題にするだけで、負の心にどのように対応したらよいか、子どもの心が負の自己感（負の心の動きに支配された自己についてのイメージ）に陥らないか、これまでほとんど考えられてきませんでした。

そもそも目に見えない心とはどのようなものでしょうか。心は、自分の興味や関心や欲求を追い求めようとする「自己充実欲求」と誰かと気持ちを繋いで安心感や満足感を得たいと思っている「繋合希求欲求」の二面性を持ちます。そしてそれぞれの欲求が満たされたり満たされなかったりすることから、心が正の側や負の側の間を揺れ動きます。一度築いた信頼関係が何かをきっかけに崩れてしまうこともあります。ここが運動や認知の能力が累積していくのとは違うところです。目に見えるところで子どもに関わっていると、子どもの心の動きは掴めません。「いま、ここ」で感じるものとしての心の動きを「接面」から捉えることがとても重要です。保育者がこうした正負両面の子どもの心の動きを捉えようとすることは、そこでそれに沿った対応を紡ぎ出すためにも、また一人の子どもをまるごと理解する上にも欠かせないはずです。

子どもの心が負の側に傾きかけた時に、まず考えなければならないのは、その子の思いをしっかり受け止め、その存在を尊重する「養護の働き」でしょう。それが不十分なままに、負の心の動きから派生する負の行動を抑えにかかる強い対応こそ、心を育むことから遠くなる対応です。子どもは受け止め認めてもらった喜びを梃子に、自分の内部に前向きな気持ちが動き始めます。その気持ちを見定めながら、子どもが一人前の大人に近づいてくることができるよう様々に「教育の働き」を振り向けていくことが大切なのではないでしょうか。その子がどのような負の心を動かしているかに目を向け、それを修復して、正の自己感に立ち返ることができるようにもっていくところに、本当の心を育む営みがあるのです。